

壺岐 世界の中の 古代

第52回特別企画展

開催のお知らせ

壺岐市立 一支国博物館

一支国博物館では、来たる令和2年12月4日（金）より令和3年1月20日（水）まで、第52回特別企画展「古代世界の中の壺岐」を開催する運びとなりました。

先史時代以来、交流・交易の中継地であった壺岐島は、古墳時代から古代にかけて外交・国防の上でも重要視されるようになっていきました。古代律令国家の成立という大きな変革の中、壺岐島がどのような役割を果たしたのか、島内の遺跡から出土した資料を中心に展示します。

つきましては、別紙のとおり、概要をお知らせしますので、ご多忙中とは存じますが、お誘いあわせの上、ご観覧くださいませようお願い申し上げます。

■第52回特別企画展「古代世界の中の壺岐」

会期／令和2年12月4日（金）～令和3年1月20日（水）

場所／令和2年12月4日（金）～令和3年1月3日（日）1階テーマ展示室
令和3年1月6日（水）～令和3年1月20日（水）3階多目的交流室

観覧料／無料

展示品数／約100点

主催／壺岐市教育委員会、壺岐市立一支国博物館

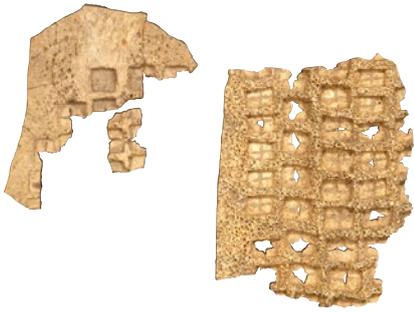
後援／壺岐市、長崎県埋蔵文化財センター

●次の内容につきましては、別添資料をご確認ください。

・主な展示品 ・関連イベント

マスク着用、手指消毒など、感染症拡大防止の取り組みにご協力をお願い致します。

主な展示品



きほくこう
龜卜甲

[串山ミルメ浦遺跡出土]
古代 [約 1400 年前から 1200 年前]

巫女が占いで用いた易占具です。亀の腹側の甲羅を将棋の駒の形や方形に整形して、小さな長方形の穴を彫り、その中に十字を規則的に刻み込みます。その甲羅を焼き、入ったヒビ割れの形によって、一年の行事や農業、漁業などの吉凶を占いました。2019年5月13日、天皇陛下の皇位継承に伴う祭祀「大嘗祭」で神々に供える米を育てる地方を決める「斎田点定の儀」では、「亀卜」によって斎田を設ける都道府県が決まりました。

串山ミルメ浦遺跡

壱岐島北端に所在する海浜遺跡で、住居跡、石組みのカマド遺構や炉址などともにアワビ・サザエの貝殻が大量に出土しました。調（地域の特産品）として、薄鮫（薄くした干しアワビ）を古代の壱岐島から朝廷へ納めていたという記録があることから、その加工作業場であったと考えられています。『延喜式（えんぎしき）』には、伊豆から5人、壱岐から5人、対馬から10人の優秀な占い師が選ばれ、朝廷で活躍したと記載されています。



ふくべんはちようれんげものきまるかわら
復弁八葉蓮華紋軒丸瓦

[壱岐嶋分寺出土]
古代 [約 1300 年前から 1250 年前]

壱岐嶋分寺跡からは、12,000点以上の瓦が出土しています。奈良時代、九州各地につくられた役所〔国府〕、有力者のすまい〔館〕、大きな寺などは、九州の政治の中心地であった大宰府と同じ文様の瓦が使われていましたが、壱岐嶋分寺では、日本の政治の中心であった平城宮大極殿と同范の瓦を使って建てられました。壱岐国〔壱岐直〕と平城京〔ヤマト政権〕との間に強い結びつきがあったことが裏付けられます。

壱岐国分寺〔壱岐嶋分寺〕跡

741（天平13）年、国分寺建立の詔を受け、各国で国分寺を新たに建立しました。壱岐国では、壱岐を統治していた壱岐直（いきのあた）が建てた寺を壱岐国分寺に昇格させたことが『延喜式』に記載されています。発掘調査の結果、塔・金堂・講堂などとみられる建物跡、門跡や寺域を区画する溝などが確認されていますが、現在は数個の礎石が残る空き地になっています。



ほっこつ
ト骨

[カラカミ遺跡出土]
弥生時代 [約 2000 年前から 1700 年前]

巫女が占いで用いた易占具です。シカやイノシシの肩甲骨に焼いた木の棒を押しつけて、ヒビの入り方や割れ方、色の変化などをみて占いました。熱い木の棒を押し当てた時についた黒斑（こくはん）が残っています。

カラカミ遺跡

島の北西部、標高 80m 程度の複雑な起伏を持つ丘陵地に位置します。ト骨のほかにも、弥生時代を中心とする多量の土器片や石器類、鯨骨製の銚（もり）やアワビおこしなどの漁撈具などが見つかっています。2013年には、国内で初めて、鉄生産用の地上式周堤付炉跡が複数発見されました。弥生時代後期のもので、いずれも床面に直接炉を作る「地上式」です。国内で確認されている、地面に穴を掘りこむ「鍛冶炉」とは異なり、韓国南部の遺跡などにみられる炉の形状と似ていることがわかりました。遺跡周辺からは鉄製品の加工時に発生する鉄片が見つかっていないことから、鉄自体を精錬し、鉄素材を本土へ供給する工場の役目を果たしていたと考えられています。



《国重要文化財》

中国北齊製二彩陶器(左)

古墳時代後期〔約 1450 年前〕

《国重要文化財》

新羅土器台付直口壺(右)

古代〔約 1400 年前から 1350 年前〕

〔双六古墳出土〕

中国北齊製二彩陶器

双六古墳は、大陸との交渉に重要な役割を果たした壱岐の首長の墓とされ、緑釉と白釉が施されている二彩陶器が出土しました。古墳からの出土品としては日本最古の貴重な資料であり、奈良時代に中国の唐三彩の影響を受けて始まった日本国内における多彩釉陶器の生産の先触れを示しています。

新羅土器台付直口壺

同心円状のスタンプ文様や三角形の中を斜線で埋めた鋸歯文(きよしもん)を丸く巡らせているのが特徴。蓋の把手付近の4方向に小さな穴が開けられており、香炉として使われたのではないかとされています。新羅の王都・慶州とその周辺でしか発見されていないため、壱岐と新羅の密接な交易を示す資料です。



滑石製弥勒如来坐像(複製品)

〔鉢形嶺出土〕

古代〔1071(延久3)年銘〕

滑石製の丸彫如来形坐像。経典を納めるため、像内は空洞に施されています。像自体を経典容器とした類例のない貴重な資料です。右肩から背面腰部にかけて、延久3年(1071)に始まる願文が刻まれ、弥勒如来の出世にそなえて法華経を像内に納めた旨が記されています。実物は国重要文化財の指定を受け、奈良国立博物館に所蔵されています。

1071(延久3)年 壱岐国司佐伯良孝が、肥後〔現在の熊本県〕の仏師慶因に命じて作らせ、法華経を像内に納め、鉢形嶺に埋納する

1676(延宝4)年 橘三喜が対馬より勝本に入り、島内にある式内社を巡る。一の宮である天手長男神社跡を訪れた際、近隣住民より像の云い伝えを聞く。

1677(延宝5)年 鉢形嶺の頂上の竹やぶを発掘し、像を発見する。

1681(延宝9)年 鉢形嶺へ再び埋め戻す。その後、何者かによって掘り出され、島外に持ち出される。

1977(昭和52)年 国の重要文化財に指定される

関連イベント“特別”特別講座「古代世界の中の壱岐」

「大宰府と古代壱岐」小田 富士雄 氏(福岡大学名誉教授)

「畿内からみた古代壱岐」林 正憲 氏(奈良文化財研究所主任研究員)

「壱岐島で活躍した海人と古代豪族たち」堀江 潔 氏(佐世保工業高等専門学校教授)

「壱岐島の古代遺跡概要」田中 聡一 氏(壱岐市社会教育課文化財班係長)

日時/令和3年1月16日(土) 13:00~16:30

場所/3階 多目的ホール

受講料/無料(発表資料集を無料で配布します)

このリリースに関する
お問い合わせ

配信停止などご要望がございましたら、お知らせ下さい。

壱岐市立一支国博物館
担当: 広報 松嶋

〒811-5322
長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地 1
TEL: 0920-45-2731 FAX: 0920-45-2749
m.matsushima@iki-haku.jp